

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

なぜ人を殺してはいけないのかを、子どもにどうやって説明したらいいか。そんなギロンが少し前にありました。

あるテレビ番組で、実際に子どもが出てきて、「なぜ人を殺しちゃいけないんだ」と大人に質問していました。識者たちがやけに気を遣って遠慮しながら、その子どもに説教していました。

それを見ては、その子どもに言いたいと思いました。「じゃあ自分で自分を殺してみればいいじゃないか」と。何も理屈をこね回さなくても、自分のことを自分で刺してみれば、他人をなぜ刺してはいけないのかわかるはずですよ。

死について考えるのは、大切なことだと思います。

いちばん難しい、わからない問題ですけど、それでもときには、考えてみたほうがいいかもしれません。

自分が死ぬということを考えてみたとき、ぼくはそれは自分の問題ではなくて、自分のまわりにいる家族などの近い人の問題であると思います。もう少し詳しく言うと、死の間近に行くまでは、死は自分の問題だけれども、死ぬ直前で自分のものでなくなるということです。

たとえば、もう助からないということがわかっていて、延命治療を続けるかやめるかという瀬戸際になったとします。もし本人が「延命治療はしないでくれ」と事前に言っていたとしても、その人の家族が全員納得しない限り、生命維持装置を外すということにはならないでしょう。

家族や親しい人が、その人の死を納得したとき初めて、「死」は成立するというのがぼくの考えです。

生物学的に言うと、人間の死というのは「今、この瞬間に死んだ」とは言えないものなんだそうです。

人間の細胞というのは、まず粘膜のところから死ぬ。そして全身の細胞が順々に死んでいく。つまり、「ここまでするが死、ここから死」と区切れるものではないということです。

便宜的に、心臓が止まったその時点が「死」であると決めたりしていますが、絶対ではありません。本当は、もっと(2)のある概念なのです。死が点や線ではなく、(2)であるということは、近年の脳死のギロンを見ているとよくわかります。

「別の系列」とはどういうことかというところ、赤ん坊のときから臨終の瞬間までの全部を照らし出すような場所にある、ということですよ。つまり、死の側からは、生の「カテイ」の全部を見渡すことができるということですね。

ぼくも、フーコーの考え方の通りではないかと思っています。死はいつも、ぼくたちのそばにあって、ぼくたちの生を照らし出しているのです。

生まれて、大人になって、老人になって、その次に死がやってくるといえるのは、仏教的な考え方です。生と死が直線的につながっていて、生の終点が死であるという考え方は、生と死が直線的につながっている、生の終点から、浄土というものが実体としてあるというふうに考えます。死んだら浄土へ行くんだ、というように。ぼくのお爺さん、お婆さんもそう考えていました。死ぬという言葉は使わずに「浄土へ行く」と言っていました。

浄土がどこかに存在すると信じていたんです。けれども、仏教のお坊さんでも、それとは違う考え方をしている人もいます。親鸞という人です。親鸞は天才的な人で、浄土真宗の教祖ですが、浄土というものはあるとは思っていませんでした。むしろフーコーと同じように、死は生とは別の系列にあると考えていたのです。

親鸞は、念仏さえ唱えていれば、お寺も要らないし仏像も要らないと言いついていた人です。お寺なんかなくても、いろんな人が集まって話をすると、だだっ広い空間があればそれでいいんだと。その「へや」に、念仏が書いてある掛け軸でもあれば十分だと言っているのです。

そんなふうになんか大事にした親鸞ですが、死ぬ間際に、浄土へ行くために一生懸命念仏を唱えることが重要だという当時の考えは間違いだと言っています。

こういう考え方をするといいことは、ある意味で、(6) 仏教というものをぶった切ってしまったというか、仏教に終焉を与えたとも言えます。

ぼくは、フーコーや親鸞の死に対する考え方に心をひかれます。生と死は直線的につながっているわけではないのですから、生きているということは、死に向かっている間はずっと、それこそ死の間際まで、自分の中の矢印を生む方向へ向けておくべきだと思うのです。

(吉本隆明「13歳は二度あるか」)

脳死というのは、脳の機能が停止して、もうもとには戻らない状態になったということです。

呼吸を司っているのは脳ですから、人工呼吸器をつけない限り、自発呼吸はできない状態です。そうなったら、たとえ心臓が動いていても、それを「死」と考えよう、というのです。

しかし、脳は死んでいても、心臓や、皮膚や、内臓は生きています。人間は、全部がいつせいに死んでしまわなければならないということです。

この脳死というのは、臓器移植をするために引っぱり出されてきた考え方だとは思います。

もう元には戻らない——つまり、人工呼吸器をつけないで(3)に呼吸をしたり、ものを感じたり考えたり、自分で身体を動かしたりはできないというのは本当なのでしょう。けれども、心臓が動いていて身体も温かいのに、「脳死状態ですから臓器を切り取らせてください」と言われても、家族は納得できないのが当たり前ではないでしょうか。

だから、ぼくは脳死を人の死とし、臓器移植を行うことには反対なのです。生前に本人が「自分が脳死状態になったら臓器を使ってもいい」という意思を表明していたとしてもです。

なぜなら、人間は、最後の最後には、自分の死を支配できないと思うからです。家族や近親者など、その人のことを大事に思っていて、一生懸命に「生かす」ために努力する人たちが納得しなければ、それは死ではないのです。

だから、死に方を自分で決めることは「ムイミ」です。あまり苦しむのはいやだから、いざとなったら安楽死させてくれとか、延命措置はとらないでくれとか、家族に指示しておく人がいますが、いざそのときになったら、死はもう自分の手から離れてしまっていると考えたほうがいいでしょう。

死後、つまりお葬式についてもそうです。

お葬式も、本人のためではなくて、後に遺された人たちが納得するためがあります。だから、生前にいろいろと計画して指示しておくのは、死というものについて、どこか考え違っているような気がしてなりません。生まれて、成長して大人になって、年長して老人になって、その後には死がやってくる——皆さんはそんなふうには考えていませんか。

ぼくの好きな、フーコーというフランスの哲学者は、これとは違う考え方をしています。死とは、生が終わった後にやってくるのではなくて、生とは別の系列にある、ということです。

★延命……命を延ばすこと

★安楽死……助かる見込みのない病人を、本人の希望に従って、苦痛の少ない方法で人為的に死なせること

★終焉……終わり

問一 — 線(1)「今、この瞬間に死んだ」とは言えないもの」とありますが、それはなぜですか。本文の表現を用いて五十文字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マス用いること)

問二 — (2)には同じ漢字が入りますが、その漢字を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幅 イ 隙 ウ 溝 エ 面

問三 — (3)に当てはまる熟語として、もっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自発的
イ 受動的
ウ 連鎖的
エ 消極的

問四 — 線(4)「人間は、最後の最後には、自分の死を支配できない」とありますが、筆者は死をどのようなものだと考えていますか。——線(4)より前の表現を用いて三十文字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マス用いること)

問五 — 線(5)「生とは別の系列にある」とありますが、このことを具体的に説明している部分を、本文から三十文字以上三十五文字以内で抜き出ささい。(句読点も含み、必ず一マス用いること)

問六

——線(6)「仏教というものをぶった切ってしまった」とありますが、親鸞はどのような仏教的な考え方を否定してしまったのですか。本文の表現を用いて、次のらんに入合うように二十五字で抜き出しなさい。(句読点も含み、必ず一マス用いること)

二十五字 という仏教的な考え方を否定してしまったということ。

問七

——線(7)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人を殺してはいけない理由は、殺される側の立場に立ってみれば説明するまでもないことであり、識者たちが難解な理論を持ち出すのは、死を生とは別の系列の特殊なものと見なす偏見によるものである。

イ 死を自分の問題であると考え、いざとなったら安楽死させてくれとか、延命措置はとらないでくれとか家族に言いのこしておいたり、生前にいろいろと葬式の計画や指示をしたりしようとする。

ウ 脳死というのは、脳の機能が停止して、もうもとには戻らない状態になったこととされているが、今後の医学の発展により、回復する可能性も十分あるため、臓器移植に利用するのは問題がある。

エ 浄土真宗の教祖である親鸞は、念仏さえ唱えていればどのような人でも浄土に行くことができ、お寺も仏像も要らないと言い切った、世界の仏教の歴史の中でも最もめずらしい天才的な人物であった。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「あつ……」

聡子は両手をあげたままで、のり子と見つめあった。

「久しぶり」

聡子が言うと、のり子はさっと顔をそむけて、歩きだしてしまう。

「のり子！」

聡子はあわててあとを追った。

「なにしに來たの？」

のり子は、あとを追ってくる聡子をじろつとにらむ。

「会いにきたの」

「なんで？」

聡子はこたえにつまってしまう。なんぞって言われても、うまく説明できない。カバンの中に先生から預かったプリントはあるけど、もちろんそれだけじゃない。

「私って、迷惑なんですよ。いっしょにいると、迷惑なんですよ！」

聡子が黙っていると、のり子がつづけた。

「聡子だって、世津といっしょなんですよ。私に助けてもらったり、手伝ってもらったんびに、うざいって思ってたんですよ。私といっしょにいるのは、私立の中学に行くまでの辛抱とか思ってたんですよ」

聡子は、おもわず目をふせた。やっぱりそうだったんだと、くちびるをかむ。

思ったとおりだった。あの日、世津のお母さんは、のり子に本当のことを話してしまったのだ。それで、のり子は学校に來ようとしなかったのだ。

それを世津のお母さんのせいだと思うのは、かんたんだった。だけど、聡子だっていけないのだ。世津の転校の本当の理由を言わずに、のり子に世津の家に行かせたのだから。

「聡子もそうなんですよ」

のり子が立ちどまって、気まずそうな顔をしている聡子を、にらみつける。

「そうなんですよ！」

のり子が聡子のシャツをつかんで、自分のほうにひきよせる。のり子の顔がごく近くになって、その勢いで、おもわず本音が出てしまう。

「うん」

のり子が一瞬泣きそうな顔を見せる。聡子は、大きく深呼吸してつづけた。「私、⁽²⁾のり子が恐くて、いつも本当のことが言えないんだ。だから、世津の転校も知らんぷりしたし、嫌いでも、好きって言ったり、いやでも、いよいよ言ってた……だから……」

本音を話す聡子を、のり子が信じられないという顔で見つめていた。聡子はドキドキしていた。顔をたかされるかもと覚悟した。

「だったら、なにしに來たのよ」

のり子の低い声で、聡子は歯をくいしばった。

「帰ってよ！」

のり子がいきなり聡子のシャツを離した。とっさのことにバランスをくずした聡子は、よろけて、そのまましりもちをついてしまった。

「本当は私のことなんて嫌いなのに、心配してるふりして、うちになんて來ないでよ！」

のり子はしりもちをついた聡子を見おろしていた。その顔は怒ってるというより、かなしそうだった。

「別に、心配なんてしてないよ」

聡子はしりもちをついたまま、手についた汚れをバンバンとたたいた。おしりや手より、胸が痛かった。

「友達ぶってるわけじゃないよ」

自分で立ちあがって、スカートについたほりをきちんとはらう。

「ただ、なんで学校に來ないのかわかって思っただけだよ」

もう、⁽³⁾はやめようと思った。

「のり子って、うざいんだけど……。のり子が來ないと、私、ひとりなんだよね。休み時間とか、給食のとき、困るんだよね」

正直に言おうと思った。

「だから、明日は來てね」

のり子は、聡子をじつとにらみつけていた。泣くのをこらえるような目つきだった。

「掃除当番なんか代わってくれなくていいから。宿題もうつさせてくれなくていいから……明日は來てね」

聡子ものり子を見つめかえす。

そして、じゃあねと手をあげると、パツと身体をひるがえして、今來た道を、ひとりて戻っていった。のんびりと散歩する犬とおじいさんを追い

抜いて、車がないことをいいことに、信号を無視して車道に飛び出す。立ちどまりたくなかった。ちょっとでも立ちどまったら、動けなくなりそうだった。

正直に言った。のり子はきつとますます傷ついた。

「そんなことないよ。私にはのり子が必要だよ。いないと死んじゃうくらい、寂しいから、はやく学校に来て！」

こう言えはのり子が喜ぶってわかってたのに、聡子は言わなかった。

だってもう、のり子の子分であるのはイヤ。笑いたくないのに笑ったり、本当の気持ちとは、違うことを言ったりするの、イヤ。ビート板をつかって泳げば楽だけど、それじゃ本物のスイマーになれないのと同じ。もう嘘はイヤ。私はもう、ビート板なしで泳いでみたいんだ。

聡子は行進するときみたいに、腕を大きくふって歩いた。そうでもしないと、足が止まってしまいそうだった。腕を大きくふれば、足は動いて、ちゃんと前に進んだ。聡子の目の前に、⁽⁴⁾ ゆっくりと沈もうとしている、太陽が見えていた。

それから何日かたったあと、のり子が学校に来た。

のり子は、聡子とすれちがっても、ひとことも口をきかなかった。

休み時間になっても、ひとりでトイレに行くし、教室移動のときもひとりで移動していた。

なおちゃんや世津がいれば、

「ねえ、世津となおちゃんと私の三人だけで、図書室に行こう！」

そう言っ、聡子だけを置いてみんなどこかに行ってしまうはずだった。そんな意地悪をしているはずだった。

だけど今は、なおちゃんもいない。世津もいない。のり子は聡子を仲間はずれにできない。

給食の時間のことだった。のり子がいるので、聡子はもう、かりんちゃんたちにさそってもらえない。仕方がないので、聡子は自分の机を抱えて、のり子の席に近よった。そして、向かい合わせではなく、となりに机を置いた。

のり子はなにも言わなかった。聡子もなにも言わなかった。

他のグループの子たちは席を向かい合わせにして、楽しくおしゃべりして食べていた。だけどふたりは、口をきかずに、もくもくとパンや牛乳を

次の日の休み時間。

「今日は、私、どこでもいいよ」

のり子がぼそりと言った。

「昨日は飼育室につきあつてもらったから」

のり子が、こんなふうに聡子の意見をきいてくれたのは、初めてだった。

「まあ、行きたいところがなければ、私が決めてもいいけどね」

聡子の顔を見ようとしないうり子は、ちょっと照れてるみたいだった。

「じゃあ、教室にいる。で、ストーリーゲームしたい」

聡子はせっかくなので、自分のやりたいことを言ってみた。ストーリーゲームとは、国語辞典から単語をてきとうに十個選んで、その十個の単語をつかって物語を考えるというゲームだ。

「ええっ、ストーリーゲーム？」

のり子はこのまえ、国語の時間にやったそのゲームが、嫌いなようだった。

「今、休み時間なんだけどね。勉強する時間じゃないんだけどね」

それでも聡子がゆずらないと、のり子はあきらめたように国語辞典をとりました。

まず、お互いに辞典から五個ずつ単語を選ぶ。

聡子は、辞典から単語を選びながら思った。

正直だと、ぶつかってばかりで疲れる。嘘ばかりだと、つまらなくてイライラする。でも、ときどき意見をゆずると、逆にゆずってもらえたりする。⁽⁶⁾ ビート板なしで泳ぐのって、むずかしい……。

「選んだ？」

のり子が辞典から⁽⁷⁾ 顔をあげた。

「うん」

聡子を選んだ言葉は、果物、食器、靴、苦痛、魔法。
のり子を選んだ言葉は、森林、図書、開発、旅行、壁紙。

「ああ、みごとにバラバラじゃん。こんなんで、どんな物語つくれっていの」

のり子は文句を言いながらも、さっそくノートをひろげていた。そのあと、ふたたび必死になってつくった物語は、とんちんかんで、へんてこりんで、だけどそれが面白くて、ふたりはつくってるあいだ、くすくす笑ってばかりいた。

公立の中学に行っ、またのり子と同じクラスになっても、悪くはない

口に運んでいた。

そうしてふたりは、しばらくの間、給食の時間だけいっしょにいた。ある日のことだった。理科の実験で、ふたり一組にならなければならなかった。

すると、のり子が聡子にすつと近よってきた。聡子はなにも言わなかった。

た。のり子もなにも言わなかった。なにも言わないまま、ふたりはビーカーを用意したり、水槽にぬるま湯をいれたりする作業を始めた。

「聡子、もたもたしないよ、スポイト持ってきてよ」

途中、のり子の怒ったような声がとんだ。

「自分で行けばいいじゃん」

聡子はのり子の言いなりにはならない。

「私は今、水の用意してるの」

「私だって、今、お湯とインクを混ぜてるんだもん」

聡子は負けなかった。

仕方がないので、ふたりはいろんなことをジャンケンで決めて、その実験をのりこえた。

だからって、別に仲良くなったわけじゃなかった。

でもそれがきっかけで、いっしょにいるようにはなった。

休み時間にのり子言う。

「聡子、図書室に行くよ」

「私は、パソコン教室に行きたい」

どっちの希望を通すかは、やっぱりジャンケンで決めた。

口を開けば、意見は違うし、お互いにむつとすることはかりで、にらみあったり、そっぽをむいたりするの、いつもいっしょにいた。だって、ふたりでいるしかなかったから。

もちろん、ストレスがたまった。聡子はそのストレスを、土曜日にプールでお父さんをビシビシしごくことで、発散していた。

だけど、とうとうある日。聡子はいちいち意見がぶつかることに疲れて、

「今日は私、どこでもいいよ。のり子の行きたいところでいいよ」と言った。

「じゃあ、飼育室に行く」

満足そうなのり子を見て、聡子は、意見がぶつからないって楽ちんだな、と思った。もう、のり子の言いなりでもいいやって思った。

かな。

とんちんかな物語を読みながら、聡子はちょっとだけそんな気持ちになった。

(草野タキ『ハッピーノート』)

問一

——線(1)「聡子もそうなんですよ」とありますが、それはどういうことですか。本文の表現を用いて七十字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二

——線(2)「のり子が恐くて、いつも本当のことが言えないんだ。」とありますが、聡子はのり子に何をされることを恐がっているのですか。本文から五字で抜き出しなさい。

問三

(3) に当てはまる漢字一字を本文から抜き出しなさい。

問四

——線(4)「ゆっくりと沈もうとしている、太陽が見えていた。」とありますが、この描写は何を表していますか。もつともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太陽が沈み、夜の闇が近づいてくる様子を描くことで、本当のことを知ったのり子の暗い気持ちを表している。

イ 太陽が沈み、夜が訪れる様子を描くことで、のり子と聡子の関係がもう手遅れであることを表している。

ウ 太陽が沈み、夕焼けに包まれていく様子を描くことで、正直になつた聡子の晴れ晴れとした気持ちを表している。

エ 太陽が沈み、一日が終わる様子を描くことで、今までの聡子とのり子の関係が終わろうとしていることを表している。

問五

——線(5)「今日は、私、どこでもいいよ」のり子がほそりと言った。」とありますが、この時ののり子の気持ちはどのようなものですか。もつともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昨日聡子が希望を譲ってくれたので聡子の意見を聞くことにしたが、初めてのことなので恥ずかしく思っている。
イ 今まで誰かの意見を聞いたことがなかったので、自分らしくない行動だと思い、はじめに思っている。
ウ いちいち意見がぶつかることに疲れた聡子がまたのり子のいいなりになったので、ほっとしている。
エ 聡子が意見はぶつからないほうが楽だと考えるようになり、いいなりになったので、張り合いがないと感じている。

問六

——線(6)「ビート板なしで泳ぐのって、むずかしい……。」とありますが、聡子がむずかしいと感じたのは、具体的にどうすることですか。本文の表現を用いて三十五字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問七

——線(7)「顔」とありますが、これと同じ「顔」を使った次の一～五の慣用句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 顔を立てる
二 顔が売れる
三 顔が広い
四 顔から火が出る
五 顔に泥をぬる

【意味】

- ア 有名になる
イ はずかしくて顔が赤くなる
ウ 世の中の色々な人を知っている
エ はじをかかせる
オ 信用をつぶさない

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア のり子がまた学校に来るようになってから、聡子は給食の時間だけ一緒に過ごすようになり、気持ちがほぐれていった。
イ いろんなことをジャンケンで決めていっしょに実験を乗りこえたことがきっかけになり、二人は一緒に行動するようになった。
ウ のり子も聡子も意見をゆずらなかつたために、根負けした聡子は自分に正直でいることに疲れてしまった。
エ のり子が嘘をつかなくなったことで、聡子は公立の中学に行つて、またのり子と同じクラスになつてもいいと思うようになった。

